

陸連時報 五三

2014
平成26年

5 月号

題字は平沼亮三(初代陸連会長)の書

目 次

2014年主要競技会日程	198
理事会報告	199
強化関連情報(強化委員会)	202
オリンピック育成競技者長距離U19海外研修合宿報告(強化育成部中長距離主任 荻原知紀)	
オリンピック育成競技者U23海外研修合宿報告(強化育成部副部長U23統括 麻場一徳)	
第3回オリンピック育成競技者研修合宿報告(強化育成部副部長U19統括 清水禎宏)	
U16ジュニアブロック研修合宿報告(普及育成委員会普及育成部副部長 舟橋昭太)	205
アジア陸上競技連盟(AAA)カウンスル会議報告(国際委員長 田中克之)	207
国際陸上競技連盟(IAAF)技術委員会報告(事務局事業部専任課長 関幸生)	209
大会観戦ガイド	211
陸協NEWS	212
事務局からのお知らせ	214

公告

「陸連時報」は公益財団法人日本陸上競技連盟定款第4条第6号の「機関誌」の性格を有するものですが、毎月「陸上競技マガジン」と一体として発行しています。陸上競技に関する啓発記事のほか、必要に応じて、評議員会、理事会の決定事項、各専門委員会、事務局からの報告、通達も掲載いたします。本時報に掲載した通達は、公式に通達したものと取扱わさせていただきますので、登録競技者は本時報の掲載内容にご注意下さい。また、陸上競技指導者の方は、所属競技者にお知らせ下さるようお願い致します。

公益財団法人日本陸上競技連盟

2014年度主要競技会日程

主催競技会				後援競技会・協力団体主要競技会				国際競技会			
期日	競技会名	場所	期日	競技会名	場所	期日	競技会名	場所			
4月	20(日) 98	日本選手権50km競歩	石川	5(土)★	23 金栗記念選抜中・長距離	県民総合(熊本)					
	20(日) 16	長野マラソン	長野	19(土)~20(日)★	GP① 兵庫リレーカーニバル	ユニバー記念(兵庫)					
5月	11(日)	ゴールデングランプリ	国立(東京)	19(土)~20(日)★	68 出雲陸上	浜山(島根)					
	31(土)~6/1(日) 98	日本陸上競技選手権混成	長野市営(長野)	26(土)~27(日)★	GP② 日本選抜陸上和歌山	紀三井寺(和歌山)					
	31(土)~6/1(日) 30	日本ジュニア選手権混成	長野市営(長野)	29(祝・火)★	GP③ 織田記念陸上	広域公園(広島)					
				3(祝・土)★	GP④ 静岡国際陸上	エコパ(静岡)	3(土)~4(日) 26	ワールドカップ競歩	太倉(中国)		
6月	6(金)~8(日) 60	全日本中学通信陸上	各地	6(祝・火)★	14 水戸招待陸上	Kスタ水戸(茨城)					
	6(金)~8(日) 98	日本陸上競技選手権	とうほう・みんなのスタジアム(福島)	10(土)★	25 ゴールデンゲームズinのべおか	延岡(宮崎)	21(水)~22(木) 2	ユースオリンピック・アジア地域予選	バンコク(タイ)		
7月	30(水)~8/3(日) 67	全国高校陸上	小瀬(山梨)	11(日)★	24 仙台国際ハーフマラソン	宮城	24(土)~25(日) 1	世界リレー選手権	ナッソー(バハマ)		
	8(金)~10(日) 49	全国定通制高校陸上	駒沢(東京)	18(日)★	4 ぎふ清流ハーフマラソン	岐阜					
8月	17(日)~20(水) 41	全国中学陸上	丸亀(香川)								
	20(水)~21(木) 49	全国高専陸上	宿毛(高知)								
	22(金)~23(土) 30	全国小学生陸上	日産スタジアム(神奈川)								
	25(月)~27(水) 22	日・韓・中ジュニア交流競技会	北上(岩手)								
9月	30(土)~31(日) 2	全国高校陸上選抜	ヤンマーフィールド長居(大阪)	31(日)★	14 北海道マラソン	北海道	12(水)~15(日) 16	アジアジュニア陸上競技選手権	台北(チャイニーズ・タイペイ)		
				5(金)~7(日)○	83 日本学生個人	平塚(神奈川)	6(日) 1	3ヶ国交流陸上	金華(中国)		
10月	3(金)~5(日) 30	日本ジュニア選手権	瑞穂(愛知)	19(金)~23(祝・火)★	29 サロマ湖100kmウルトラマラソン	北海道	22(火)~27(日) 15	世界ジュニア陸上競技選手権	ユージーン(アメリカ)		
	3(金)~5(日) 8	日本ユース選手権	瑞穂(愛知)	12(土)★	39 蔵王坊平クロカン	かみのやま(山形)					
11月	18(土)~22(水) 69	国民体育大会	県立総合(長崎)	3(日)★	54 実業団・学生対抗	小田原(神奈川)					
	31(金)~11/2(日) 98	日本選手権リレー	日産スタジアム(神奈川)								
	31(金)~11/2(日) 45	ジュニアオリンピック	日産スタジアム(神奈川)								
	16(日) 6	横浜国際女子マラソン	神奈川								
12月	24(祝・月) 14	国際千葉駅伝	千葉	5(金)~7(日)○	83 日本学生対校	熊谷(埼玉)	13(土)~14(日) 2	コンチネンタルカップ	マラケシュ(モロッコ)		
	7(日) 68	福岡国際マラソン	福岡	19(金)~23(祝・火)★	35 全日本マスターズ	北上(岩手)	19(金)~23(祝・火) 18	アジアマスターズ	北上(岩手)		
2015 1月	13(土)~14(日) 17	小学生クロスカントリーリレー	万博記念公園(大阪)	21(日)★	54 実業団・学生対抗	小田原(神奈川)	27(土)~10/3(金) 17	アジア競技大会	仁川(韓国)		
	14(日) 22	全国中学駅伝	山口								
2月	21(日) 65	26 全国高校駅伝	京都								
	11(日) 33	都道府県対抗女子駅伝	京都								
3月	18(日) 20	都道府県対抗男子駅伝	広島								
	25(日) 34	大阪国際女子マラソン	大阪								
3月	7(土)~8(日) 15	日本ジュニア室内大阪	大阪城ホール(大阪)								
	8(日) 50	千葉国際クロスカントリー	昭和の森(千葉)								
3月	15(日) 98	日本選手権男女20km競歩	兵庫								
	21(土) 29	福岡国際クロスカントリー	海の中道海浜公園(福岡)								
3月	22(日) 15	東京マラソン	東京								
	1(日) 70	びわ湖毎日マラソン	滋賀								
3月	8(日) 15	名古屋ウィメンズマラソン	愛知								
	15(日) 39	全日本競歩能美	石川								
3月				1(日)○	18 日本学生ハーフマラソン	東京	15(日) 15	アジア陸上競技選手権・20km競歩	能美(石川)		
				15(日)○	9 日本学生20km競歩	石川	28(土) 41	世界クロスカントリー選手権	貴陽(中国)		
				18 日本学生女子ハーフマラソン	島根						

★=後援競技会、○=協力団体主要競技会 ※2015年1月~3月の後援競技会は2014年5月下旬に決定します。

理事会報告

第19回理事会

日時：2014年3月12日（水） 14：00～16：10

場所：ハイアットリージェンシー東京 地下1階「天平」

【議題】

〈協議事項〉

1. 第4期事業計画・予算編成
2. 2013年度栄章
3. 2014年度主要競技会日程
4. 登録会員規程改定
5. S級公認審判員昇格候補者
6. 公認審判員規程改定
7. 定時評議員会の開催

〈報告事項〉

1. 第12回アジアクロスカントリー選手権大会報告
2. 国際競技大会報告
3. 第1回3ヶ国交流陸上競技大会開催要項
4. 2014年度後援競技会（10～12月開催分）
5. 2014年度強化競技者
6. 競技会における広告および展示物に関する規程
7. その他

【議事内容】

開会に先立ち、風間事務局長より理事定数29名、出席者数23名で本理事会が有効に成立した旨を報告し議題に入る。

〈協議事項〉

1. 第4期事業計画・予算編成

尾縣専務理事より事業計画について、杉本理事・財務委員長より収支予算について、それぞれ資料に基づき説明があり、ともに承認された。事業計画の要旨は以下の通り（事業計画及び収支予算は本連盟公式ホームページに掲載）。

- ①陸上競技の普及及び指導者の育成に関する事業
 - ・キッズアスリート・プロジェクト「夢の陸上キャラバン隊」は2013年度をもって全国を一巡したため、2014年度は新たな展開を検討している。
 - ・2013年度より全国展開を開始した公認ジュニアコーチ講習会を、2014年度は全国13会場で実施する予定である。
- ②陸上競技の競技力の向上に関する事業並びに陸上競技の国際競技大会等に対する代表参加者の選定及び派遣に関する事業

表1 功労章

No	地域	氏名
1	関東 埼玉	藤間 修一
2	近畿 滋賀	谷 宇一郎
3	本部 ー	井上 有美

表2 秩父宮章

No	地域	氏名
1	北海道 (1)	北海道 林 義寛
2	東北 (3)	岩手 土村 雅彦
3		宮城 山本 仁
4		福島 小島 哲哉
5	関東 (5)	茨城 鈴木 敏力
6		栃木 小野 勝敏
7		群馬 高橋 賢作
8		千葉 津嶋 捷志
9		神奈川 瀧川 一輝
10	東京 (1)	東京 大野 弘
11	北陸 (2)	新潟 三宮 博己
12		富山 北川 鉄人
13	東海 (4)	長野 細田 完二
14		静岡 和田 隆保
15		愛知 若松 良一
16		岐阜 瀬上 和雄
17	近畿 (4)	滋賀 井花 一郎
18		京都 米井 勝秀
19		大阪 讃岐 富男
20		兵庫 山口 幹夫
21	中国 (3)	鳥取 伊藤 義寛
22		岡山 田村 健兒
23		広島 樽谷 和子
24	四国 (2)	香川 平井 竹幸
25		愛媛 濱崎 栄則
26	九州 (4)	福岡 八木 雅夫
27		佐賀 高橋 正秀
28		熊本 星子眞佐郎
29		宮崎 森 滋
30	本部 (6)	実業団 池田 守男
31		学連 金子今朝秋
32		本部 横川 浩
33		強化 武雷 豊
34		国際 田中 克之
35		施設用器具 平塚 和則

- ・2014年度の主要国際競技会は9月に開催される第17回アジア競技大会であり、これは2016年リオデジャネイロオリンピックの強化戦略上の起点となる大会である。
- ・2020年の東京オリンピックに向けて「2020強化普及オリンピック特別対策プロジェクト」の中長期戦略のもと、次世代を担う競技者育成に取り組む。
- ・新設された世界リレーは、2015年の北京世界選手権の出場権がかかっており、重要な大会と位置付けている。
- ・リオデジャネイロオリンピックや東京オリンピックに向けて、医科学サポートも重視していく。また、ドーピング防止活動にもより積極的に取り組みたい。

③その他

- ・加盟団体法人化につき、2014年4月1日時点で43の団体が法人格取得の予定であり、残り4団体となっている。

2. 2013年度栄章

尾縣専務理事より栄章候補者につき資料に基づき説

明があり、承認された（功労章・秩父宮章は表1、表2の通り）。

3. 2014年度主要競技会日程

尾縣専務理事より主要競技会日程につき資料に基づき説明があり、承認された。昨年度との主な変更点は下記の通り。

- ・8月25日、27日に開催される日韓中ジュニア交流競技大会につき、2014年度は日本開催であるため主催となる。
- ・8月開催のユースオリンピックが16日から28日と期日が確定した。

4. 登録会員規程改定

尾縣専務理事より登録会員規程の改定につき資料に基づき説明があり、承認された（表3）。

5. S級公認審判員昇格候補者

吉儀理事・競技運営委員長よりS級審判員昇格候補者につき資料に基づき説明があり、承認された。

表3 公益財団法人日本陸上競技連盟登録会員規程改定

従前	変更後
<p>(登録の種類)</p> <p>第6条 団体登録：加入団体に所属しておこなう登録。団体登録会員は加入団体が所属する都道府県陸協の所属となる。団体登録会員のユニフォームやプログラムなどへの所属表記は所属する加入団体名となる。</p> <p>個人登録：個人でおこなう登録。個人登録会員は居住している地域の都道府県陸協の所属となる。個人登録会員のユニフォームやプログラムなどへの所属表記は所属する都道府県陸協名となる。</p> <p>中学生登録：日本中学校体育連盟（以下中体連という）登録競技者</p> <p>高校生登録：全国高等学校体育連盟（以下高体連という）陸上競技部および定通制部登録競技者</p> <p>大学生登録：日本学生陸上競技連合（以下日本学連という）登録者</p>	<p>(登録の種類)</p> <p>第6条 団体登録：加入団体に所属しておこなう登録。団体登録会員は加入団体が所属する都道府県陸協の所属となる。団体登録会員のユニフォームやプログラムなどへの所属表記は所属する加入団体名となる。</p> <p>個人登録：個人でおこなう登録。個人登録会員は居住、もしくは勤務している地域の都道府県陸協の所属となる。個人登録会員のユニフォームやプログラムなどへの所属表記は所属する都道府県陸協名となる。</p> <p>中学生登録：日本中学校体育連盟（以下中体連という）登録競技者</p> <p>高校生登録：全国高等学校体育連盟（以下高体連という）陸上競技部および定通制部登録競技者</p> <p>大学生登録：日本学生陸上競技連合（以下日本学連という）登録者。日本学連加盟校の学生の登録は、次のいずれか一つの都道府県陸協を選択する。</p> <p>(1) 出身高等学校所在地</p> <p>(2) 大学所在地（大学所在地が複数の都道府県にまたがる場合は学生の在学している学部、学科のある都道府県）</p> <p>(3) 居住地</p>
<p>(登録の期間)</p> <p>第7条 登録は毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。</p> <p>2 前項に関わらず、当該年度の登録申請は毎年12月末日までとする。</p>	<p>(登録の期間)</p> <p>第7条 登録は毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。</p> <p>2 前項に関わらず、当該年度の登録申請は毎年12月24日までとする。</p>

従前	変更後
<p>(登録の手続き)</p> <p>第10条 団体登録・個人登録：都道府県陸協は、毎年5月第1日曜日までに登録会員名簿を本連盟へ提出しなければならない。</p> <p>登録会員の追加、変更があった場合は、そのつど速やかに提出するものとする。</p> <p>登録料は各都道府県陸協がこれを定める。</p> <p>中学生登録：中学校の生徒の登録は、学校単位で都道府県陸協に団体登録するものとする。都道府県陸協は7月末日までに登録会員名簿を本連盟に提出しなければならない。登録料は、各都道府県陸協と各都道府県の中体連がこれを定める。</p> <p>高校生登録：高等学校および定通制通信制高等学校の生徒の登録は、学校単位で都道府県陸協に団体登録するものとする。都道府県陸協は5月末日までに本連盟に登録会員名簿を提出しなければならない。登録料は、各都道府県陸協と各都道府県の高体連陸上競技部、または都道府県高等学校体育連盟定通部がこれを定める。</p> <p>大学生登録：日本学連加盟校の学生の登録は、次のうちのいずれか一つの都道府県陸協を選択する。</p> <p>(1) 出身高等学校所在地</p> <p>(2) 大学所在地（大学所在地が複数の都道府県にまたがる場合は学生の在学している学部、学科のある都道府県）</p> <p>(3) 居住地</p>	<p>(登録の手続き)</p> <p>第10条 本連盟が定める所定の手続きにより登録を行う。</p>

6. 公認審判員規程改定

吉儀理事・競技運営委員長より公認審判員規程の改定につき資料に基づき説明があり、承認された(表4)。

表4 公認審判員規程改定

現行規定	改定
第4条	
A級公認審判員で満10年を経過し、60歳(3月末を基準とする)に達した者はS級公認審判員となりうる資格を有する。毎年、加盟団体から推薦された者につき、 <u>競技運営委員会審判部で審査し、理事会の承認を経て本連盟がこれを委嘱する。</u>	A級公認審判員で満10年を経過し、60歳(3月末を基準とする)に達した者はS級公認審判員となりうる資格を有する。毎年、加盟団体から推薦された者について、 <u>競技運営委員会</u> で審査の上認定し、本連盟がこれを委嘱する。
第6条	
公認審判員は、本連盟が定める <u>公認審判員証(手帳)</u> を所持し、 <u>公認審判員章(マーク)</u> および <u>バッジ</u> を着用して競技会の審判にあたるものとする。	公認審判員は、本連盟が定める <u>公認審判員手帳</u> を所持し、 <u>公認審判員証(カード)</u> および <u>バッジ</u> を着用して競技会の審判にあたるものとする。

7. 定時評議員会の開催

尾縣専務理事より定時評議員会の開催につき資料に基づき説明があり、承認された。

概要は下記の通り。

日時：2014年6月4日(水) 14:00～

場所：ハイアットリージェンシー東京 27階「エクセレンス」

<報告事項>

1. 第12回アジアクロスカントリー選手権大会報告

尾縣専務理事より、2月22日に福岡において開催した第12回アジアクロスカントリー選手権大会につき資料に基づき報告した。

2. 国際競技大会報告

原田理事・強化委員長より3月7～9日までソポット(ポーランド)で開催された第15回世界室内選手権大会の結果、及び3月29日にコペンハーゲン(デンマーク)で開催される第21回世界ハーフマラソン選手権大会の日本選手団編成につき資料に基づき報告した。

3. 第1回3ヶ国交流陸上競技大会開催要項

尾縣専務理事より、2014年度に新設となる3ヶ国交流陸上競技大会の開催要項につき資料に基づき説明した。

4. 2014年度後援競技会(10月～12月開催分)

尾縣専務理事より、2014年10月から12月に開催される後援競技会につき資料に基づき報告した(表5)。

5. 2014年度強化競技者

原田理事・強化委員長より、2014年度の強化競技者につき資料に基づき報告した。

6. 競技会における広告および展示物に関する規程

山本理事・法制委員長より、競技会における広告および展示物に関する規程の改定箇所につき資料に基づき報告した。主要な改定箇所は下記の通り。

- ・フードサプリメントの広告を国内でも禁止とする。
- ・競技役員のキャップの規定を削除する。

7. その他

①日本陸上競技連盟創立90周年に向けた取り組み

尾縣専務理事より、2015年に本連盟が創立90周年を迎えるにあたり90年史の準備を行っている旨報告した。

②2020年東京オリンピックに向けた審判育成に関する取り組み

尾縣専務理事及び吉儀理事・競技運営委員長より、2020年の東京オリンピックに向けて審判の育成に関する取り組みを実施していく旨説明した。

③強化現状報告

原田理事・強化委員長より、強化の現状につき各ブロックの合宿における状況等を報告した。

④競技規則の改定

吉儀理事・競技運営委員長より、2014年度からのルール改定箇所につき説明があった。

表5 後援申請競技会(2014年10月～12月)

<継続>

競技会名	競技会期日	申請者
第62回全日本実業団対抗陸上競技選手権大会	2014年10月10日(金)～12日(日)	日本実業団陸上競技連合
第53回全日本50km競歩高畠大会	2014年10月26日(日)	一般財団法人山形陸上競技大会
第4回大阪マラソン	2014年10月26日(日)	一般財団法人大阪陸上競技協会
第11回田島直人記念陸上競技大会	2014年11月9日(日)	一般財団法人山口陸上競技協会
第30回東日本女子駅伝競走大会	2014年11月9日(日)	東北陸上競技協会
第4回神戸マラソン	2014年11月23日(日)	一般財団法人兵庫陸上競技協会
第26回全日本びわ湖クロスカントリー大会	2014年12月14日(日)	一般財団法人滋賀陸上競技協会
第34回全日本実業団対抗女子駅伝競走大会	2014年12月14日(日)	日本実業団陸上競技連合
第45回防府読売マラソン大会	2014年12月21日(日)	一般財団法人山口陸上競技協会
第33回山陽女子ロードレース大会	2014年12月23日(祝・火)	一般財団法人岡山陸上競技協会
<新規>		
2014第5回長崎陸協競歩大会	2014年12月14日(日)	一般財団法人長崎陸上競技協会

強化関連情報

強化委員会

オリンピック育成競技者長距離U19海外研修合宿報告

強化育成部中長距離主任 萩原知紀

研修合宿期間：2014年1月22日(水)～2月1日(土)

研修合宿場所：オーストラリア ビクトリア州メルボルン

派遣選手：〈男子〉藤原滋記(西脇工業高校3年)、市谷龍太郎(山梨学院大付属高校3年)、川端千都(綾部高校3年)、安井雄一(市立船橋高校3年)〈女子〉上原美幸(鹿児島女子高校3年)、由水沙季(筑紫女学園高校3年)、出水田真紀(白鵬女子高校3年)、西澤果穂(青森山田高校3年)
スタッフ：萩原知紀(強化育成部U19)、両角速(強化育成部U23)、佐野純(白鵬女子高校)、井上直生(トレーナー)、田久保美香(管理栄養士)

1. 合宿の目的

- 1) 海外でのトレーニングを経験させ、国内では体験できないトレーニング環境の中で学んだことを生かし、世界で戦うことへの意欲を高めさせる。
- 2) 管理栄養士の指導により、食物栄養についての知識を学び、アスリートとしての食生活の考え方やその実践、また自らが調理することの意義を理解させる。
- 3) 異文化の中でコミュニケーション能力を養い、海外の選手に対しても積極的にアプローチできる態度や能力を養う。

2. 合宿での成果

- 1) オーストラリア選手との練習は非常に有意義で、今回は昨年よりも合同練習の回数を増やしてもらうことができた。オーストラリア陸連所属のTimコーチ指導の下、練習場所を変えて計5回の合同練習を行った。合同練習のメンバーはオーストラリアのジュニア～シニア選手で、日本と違って異年齢の選手が同じ時間帯に同じ場所で練習をするという環境の中で一緒に練習をさせてもらった。

トレーニング内容については陸上競技場では質の高いスピード練習を行った。また、ヒルトレーニンでは二か所の国立公園で一回目はインターバルトレーニングを行い、二回目はロングジョッグを行った。同じヒルトレーニンでも、場所や内容を考え、変化に富んだ練習スケジュールを組んで頂いた。

また、日本では見ることもない芝の400mトラックに今年も連れて行ってもらった。

そこでは2013年世界クロスカントリーで活躍し、ロンドンオリンピック代表であるコリス・バーミングハムも一緒に練習に参加してくれた。U19選手たちは世界で戦っている選手を目の当たりにして、その迫力とレベルの高さに圧倒されていた。

しかし、オーストラリア選手たちと日本の高校生レベルでは体験できない質の高い練習を行うことで、世界で戦うことへの意欲がさらに増しているようであった。

なかには「高校三年間で一番苦しい練習だったが、とても楽しかった」と瞳を輝かせて練習後の感想を聞かせてくれた選手がいた。

また、トレーニング計画のなかで練習場所に気を配っているTimコーチの考えも吸収できた。ヒルトレーニン

では国立公園内の土の路面を使って、インターバルやロングジョッグを行った。そして、スピード練習は全天候トラックと芝トラックを使い分けてトレーニング計画を作っていた。路面を配慮したトレーニング計画を作成することで、いかに故障させずに継続して練習することができるかが重要であるとTimコーチは言っていた。

- 2) 今回の合宿では、管理栄養士の田久保氏に帯同して頂いた。ホテルの部屋も自炊できる4人部屋にしてもらい、男子3回、女子3回(計6回)の夕食を自炊にした。(女子は練習の関係で1回は田久保氏にお願いした)

田久保氏はシニア選手の海外合宿は慣れていているとのことであったが、ジュニア選手の海外合宿は初めてであった。その中でU19選手に栄養指導や食材の調達の手伝いや調理の仕方など、丁寧に分かり易く教えて頂いた。

選手たちも、ほとんど自宅では調理する機会もなく不慣れな点が多々あったが田久保氏指導のなかで、夕食を美味しくアスリート食としてきちんと頂くことができた。

選手たちは自炊という共同作業をすることで、選手間のコミュニケーションも良好となりチームジャパンとしての意識も高まった。

また、食材の調達のために交通手段を使うことや、買い物をする時に英語を使わなければならないことで、英会話の必要性を実感していた。

さらに田久保氏と一緒に調理することで、食材の栄養素や栄養価についての知識を得たり、選手たちが自ら質問をしたりして、アスリートとしての食生活の重要性を学んでいた。一日のうちの2時間程度ではあるが、有意義な時間を過ごすことができた。

- 3) メルボルンの治安は良好で、世界の中でも安全な町の一つである。しかし、どこの国も同じであるがいくら安全な街であっても、事故や犯罪に巻き込まれる可能性は必ずある。その危険性を念頭においた上で、危険な場所には近づかないことや自分の身は自分で守ること、単独行動はしないなどの諸注意は常に行った。練習を中心に組んでいたために、自由時間もわずかで、観光等をする時間はほとんどなかった。しかし、海外でのコミュニケーション能力を高めさせるためにも、MYKIというトラムやメトロのフリーパスカードを利用して買い物に行かせたり、自由時間に観光に行く機会を設けた。

しかし、選手らは余り遠くまでは行かなかったようである。女子選手は観光も考えていたようだが、多少の不安があったのかどうか分からないが、ホテル近くの買い物程度で済ませていた様子だった。そういった中で自分自身が海外経験の無さや語学力やコミュニケーション能力の未熟さに気づいて、今後の自己啓発に結びつけてもらいたい。

また、今回の経験を通して、世界で通用する選手になるためには語学力やコミュニケーション能力も必要であることも知ることができたと思う。

まとめ

高校三年生のトップ選手をこの時期にメルボルン合宿に連

れて行くことは大変有意義である。また、食生活も含め海外での合宿経験をする事で、将来の日本代表として世界で戦うことに対する意欲も高まったと思う。

さらに11日間の合宿期間の中で、海外の選手と交流を持ちたり自炊をしたりすることで、自立心やチームワークが芽生え、社会人・大学生生活に入る前のU19選手にとってはタイムリーであったと思う。

そして、日本では経験できない練習を数多くこなせたことは、U19選手にとっても大きな自信となりモチベーションを向上させるためには最適であった。

最後に、2020年東京オリンピックのターゲット世代である現在のU19選手に大切なことは、国際経験を一つ一つ積み上げながら(世界ユース・世界ジュニア等)、それを自分の財産とし、国際大会に立った時の自らのイメージを明確に描ける選手として成長していくことではないかと感じる。今年はユージーン(アメリカ)で世界ジュニア選手権が開催される。その舞台に立った選手が、将来的に世界で戦えるアスリートに育っていく可能性を秘めていることは言うまでもない。

〈練習内容〉

	男子	女子	備考	
1月23日 (木)	am	シドニー着		
	am	シドニー～メルボルン移動		
	pm	60jog	60jog	
1月24日 (金)	am	40jog	40jog	
	am	1000×1	1000×1+300×5	トラック
	pm	free-jog	free-jog	
1月25日 (土)	am	40jog	40jog	
	am	1300×4+200×5	1300×4+200×5	クロカン
	pm	60jog	jog+ 補強トレーニング	
1月26日 (日)	am	30jog	30jog	
	am	70jog (ヒルトレーニング)	70jog (ヒルトレーニング)	クロカン
	pm	free-jog	40jog (リッチモンド)	
1月27日 (月)	am	60jog (バットマンパーク)	11250mp走 (リッチモンド)	
	am	rest	rest	
	pm	自由行動	自由行動	
1月28日 (火)	am	30jog	30jog	
	am	1200×4+400×3	1200×4+400×3	芝トラック
	pm	60jog	60jog	
1月29日 (水)	am	30-40jog	30-40jog	
	am	60jog+w-sp100x4	free-jog	
	pm	free-jog	free-jog	
1月30日 (木)	am	30jog	30jog	
	am	各自free (1600+200×5) ×2+300×1	各自free (1600+200×5) ×2+300×1	トラック
	pm	60-70jog	60jog	
1月31日 (金)	am	出発準備		
	pm	メルボルン発		

オリンピック育成競技者U23海外研修合宿報告

強化育成部副部長U23統括 麻場一徳

今年も、昨年に引き続き、オーストラリアにおいてU23海外研修合宿を実施した。この合宿は、一昨年、U21というカテゴリーが位置づけられていたときに、その部門の責任者であった山崎一彦現強化育成部長(当時は副部長)が発案し、始めたものである。

合宿の目的は「2014年シーズンに向けて、温暖地においてトレーニングをすることによって競技的状态を引き上げるとと

もに、国際的競技者として活躍するために、競技者としての国際的コミュニケーション能力や海外での生活力を養成すること」である。したがって、単に温暖地でトレーニングをすることにとどまらず、現地アスリートとの合同トレーニングを実施したり、現地指導者からのコーチングを受けたりすることによって国際的コミュニケーション能力養成や国際的競技者を目指す上での視野拡大を目指している。また、競技力向上にとって不可欠な栄養摂取を、どんな状況にあっても過不足なくできるように、管理栄養士に帯同をしていただき、その指導の下、自炊能力を高め、自主的に栄養摂取をする能力向上をも目指すものでもある。

参加競技者は、山縣亮太、橋元晃志、ケンブリッジ飛鳥、九鬼巧、大瀬戸一馬、安部孝駿(以上がU23対象者)に加えて、この4月にU19からU23に転入する桐生祥秀、小池祐貴、加藤修也、油井快晴、山本凌雅の11名であった。スタッフとしては、山崎一彦(強化育成部長)、土江寛裕(男子短距離副部長)、杉林孝法(跳躍部委員)、長坂聡子(栄養士)、砂川祐輝(トレーナー)と麻場の6名が帯同した。

なお、この合宿には、途中から男子短距離ナショナルリレーチーム(4×100mリレーグループ)が合流し、選手・スタッフ総勢28名の大所帯となったが、その分活気に満ち、とても刺激的な合宿となった。その背景には、2000年のシドニーオリンピック当時、今回スタッフとして帯同した土江寛裕男子短距離副部長がこの地をトレーニング拠点としていたということがある。今回の合宿を挙げるにあたって、計画、準備に始まり現地のコーディネートまで、土江副部長の多大なるご尽力があったことを、あえて記しておきたい。

期間は2月17日(月)～27日(木)の11日間、シドニーオリンピック跡地に整備されたシドニーオリンピックパークにおいて合宿を行った。宿舎もオリンピックパークに隣接しており、環境としてとても恵まれた状況で実施することができた。

トレーニングのスケジュールとしては、基本的に2日練習して1日休養というパターンで臨んだ。ただし、休養と言っても、研修の趣旨を達成するために、例えば時間を指定してオペラハウスに集合し(オリンピックパークからは、電車やバスを乗り継がなければ現地へ到達できない)、現地で夕食をとるなどのプログラムを実施した。

トレーニングそのものは、個々の状況に合わせて実施する中で、現地コーチからの指導を受けながら進めた。具体的には、スプリントグループは、ナショナルスプリントコーチも務めるPaul Hallam氏からの指導をメインにしながらか進めた。中でもショートスプリントグループは、合流したナショナルリレーチームのメンバーと合同でバトン練習を行うなど、多彩なメニューをこなした。ロングスプリントグループについては、Hallem氏の指導を受けつつ、合宿後に出場する世界室内選手権への競技的準備を整えていった。400mH専門の安部選手に関しては、山崎強化育成部長からの指導によってトレーニングを進めた。跳躍での参加者は山本凌雅選手ただ一人であったが、杉林コーチのサポートを受けながら、現地クラブのコーチであるAlex Stewart氏からマンツーマンで懇切丁寧な指導をいただいた。また、NSWIS(New South Wales Institute of Sport)のスタッフによるウェイト・補強トレーニング指導も2度ほど実施された。

栄養指導については、長坂氏による指導の下、自炊と外食を組み合わせながら食事を進める中で実施していった。自炊

の場合も外食の場合も、食事を写真で撮って長坂氏に見せることによって評価、指導を受けながら進めていった。2度目の参加者が多いU23メンバーの方がU19メンバーよりも高評価を得ていることから、このプログラムの成果が着実に出ているものと感触を持っている。

オリンピックや世界選手権などの大舞台で自身の力を遺憾なく発揮するためには、その舞台に立ったときに平常心をいかに保てるかということが大きな課題となる。言い換えれば、環境的・精神的ストレスをいかにマネジメントできるかということである。そういった能力を養うために、山崎部長世代の選手たちは単身で海外に出ていった。それが、今や陸連の強化育成の施策として、システム化して位置づけられようとしている。このことは、特に2016年リオデジャネイロオリンピック、2020年東京オリンピックを目指す選手たちにとってはとても大きなことだと思われる。

山崎部長は、U23部門の大きなテーマを『『育つ』環境をいかに作るか』であると述べている。これから世界の舞台を目指す選手たちには、この環境を最大限に生かして、自らの総合的な能力を高めていってほしい。

第3回オリンピック育成競技者研修合宿報告

強化育成部副部長 U19 統括 清水禎宏

強化育成部では2014年のシーズンに向け、11月～2月にかけて、月1回の合宿を計画し実施してきた（12月の各地区で開催されたU19ジュニア強化研修合宿を含む）。12月および1月は基礎・基本を重視した合宿であったが、今回実施した合宿の大きな狙いは、専門的なトレーニングを行うことである。そのため今回で7年目となるが、温暖な沖縄県国頭村を合宿地とした。この地は宿舎から競技場まで徒歩移動が可能で、投てき練習場や雨天練習場が建設され、今や実業団や大学など様々なチームも活用するなどトレーニング環境に恵まれている。さらに宿舎の前には海が広がり、砂浜でのトレーニングができるなど変化に富んだトレーニングが可能である。また宿舎の食事や住環境も非常によく、自然豊かな土地柄で商店もほとんどないなどトレーニングに集中することのできる環境である。

このような素晴らしい環境で実施した今回の合宿は、2月19日から23日までの4泊5日の日程で、選手33名（男子17名、女子16名）、スタッフ19名（トレーナー、栄養士を含む）が参加した。オリンピック育成競技者の中には同時に開催されたオーストラリアでのU23合宿への派遣や、1・2年生を中心に所属校の諸行事（学年末テスト等）が重なり参加できなかった選手もおり前述の参加人数となった。

残念ながら天候に恵まれたとは言いが、少人数体制での練習で各種目のスペシャリストである指導スタッフが手厚く指導し、質の高い専門的トレーニングが実践された。合宿中の主な日程は右表に示した通りであるが、専門的トレーニングはもちろんのこと研修やミーティングを大切に内容とした。これは、本年度開催されるユース・ジュニア世代の国際大会（ユースオリンピック競技大会アジア地域予選、アジアジュニア選手権、世界ジュニア選手権、ユースオリンピック競技大会）での活躍を目指しながらも、将来的にシニア世代で活躍できる選手の育成を強化育成部としての大きな目標としているためである。特に今回の合宿に参加した世代が2020年に開催される東京オリンピックやその次のオリンピックの主力になることが期待される。そのため、ミーティングによる更なる動

機づけやトップアスリートとして、グラウンド上での練習はもちろんのこと、日常生活の大切さを学ぶ機会の一つ目として、松尾信之介氏（大阪学院大学）による「アスリートのためのコンディショニング」と題して心身両面にわたるコンディショニングについての研修を行った。二つ目として、濱野純氏（中京学院大学）による「陸上競技選手のための栄養・食事」の研修を受け、栄養や食事の基礎知識を学ぶとともに、バイク形式での食事の選び方について、宿舎での食事の時間を利用し、その場で指導を受ける内容とした。これらの研修を受けたことで、トレーニングの時間以外の重要性について考える機会となることを期待している。さらにブロックミーティングでは、その日のトレーニングの振り返りをはじめ、トレーニングへの取り組み方などについて、各スタッフから指導を受ける有意義な時間となった。

また、合宿のもう一つの大きな狙いは、進学を予定している高校3年生に対してトレーニングを継続させることにある。高校生としてはトップレベルの選手たちではあるが、中には明確な目標が持てないためトレーニングが継続できず、進学後の競技レベルが下がるなど、今の陸上競技界の大きな課題の一つになっている。彼らに対する高い目標設定やトレーニングの継続は必要不可欠であり、強化育成の根幹をなすものでもある。彼らの高いモチベーションを維持しつつ質の高いトレーニングを継続することが、11月より月に1回、合宿を実施してきた理由の一つでもある。幸い3年生の多くはすべての合宿に参加し、これまで以上の活躍が期待できるまでに成長したと感じている。進学先での練習環境や生活環境に早く慣れ、U23やシニアのカテゴリーで活躍することを期待している。

最後に選手の派遣に御理解を頂いた学校関係者の皆様、公務があるにもかかわらず参加頂いたスタッフの皆様、研修の講師をお引き頂いたお二人の先生方をはじめ、練習環境を整えて頂いた国頭村の皆様に感謝申し上げます。

（合宿日程表）

2月19日 (水)	2月20日 (木)	2月21日 (金)	2月22日 (土)	2月23日 (日)
	6:30朝練習	6:30朝練習	6:30朝練習	6:30朝練習
	7:00朝食	7:00朝食	7:00朝食	7:00朝食
各地区より那覇に集合し、昼食後国頭村へ移動	9:30～12:30 各ブロック練習（国頭村陸上競技場・周辺）	9:30～13:30 各ブロック練習（国頭村陸上競技場・周辺）	9:30～12:30 各ブロック練習（国頭村陸上競技場・周辺）	朝食後、各地区に分かれ宿舎を出発
	13:00昼食	14:00昼食	13:00昼食	
(17:00)各ブロック練習（国頭村陸上競技場）	15:30～17:30 各ブロック練習（国頭村陸上競技場・周辺）	16:00～18:00 研修①「アスリートのためのコンディショニング」（松尾信之介氏）	15:00～17:00 各ブロック練習（国頭村陸上競技場・周辺）	
19:30夕食	19:00夕食	19:00夕食	19:00夕食	
20:30 全体ミーティング・ブロックミーティング	20:00 全体ミーティング・ブロックミーティング	18:00 ブロックミーティング	17:30～19:00 研修②「栄養講習」（濱野純氏）全体ミーティング	
22:30消灯	22:30消灯	22:30消灯	22:30消灯	

U16ジュニアブロック研修合宿報告

普及育成委員会普及育成部副部長 舟橋 昭太(日本中体連部長)

2013年度よりスポーツ振興くじ助成金の支援を得て、念願の中学生のブロック合宿が実施されたことを大変嬉しく思います。今までの合宿は、都道府県単位がほとんどでブロック単位は関東のみでした。

今回実施したことで、各ブロックのタレント発掘、競技力の向上、競技者の意識の向上、指導者の指導法の向上など色々な面でメリットがあったように思います。もちろん課題も多く、費用面、参加人数、会場の確保、開催時期の問題、運営方法

の問題などがあげられます。これらの問題もブロック合宿を開催していくことで解決していけるようにも思います。

これで、都道府県合宿→U16ジュニアブロック研修合宿→U16トップトレーニングキャンプと道筋ができ、これから中学生アスリートの意識向上や競技力向上に少しでも生かされていけば幸いです。

この合宿を経験した中学生から東京オリンピック、世界選手権など日本代表の選手が育って欲しいと願っています。

表1 2013 U16ジュニアブロック研修合宿

ブロック	都道府県	日程	日数	開催地	会場	選手	指導者
北海道	北海道	1/5~7	3	北海道	きたえーる、セキスイハイムアイスアリーナ	44	26
東北	青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島	12/21~22	2	宮城	宮城スタジアム	207	46
関東	茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉・東京・神奈川・山梨	12/26~12/28	3	群馬	正田醤油スタジアム/敷島補助競技場/ベルアスレチックジャパン	532	121
北信越	新潟・長野・富山・石川・福井	12/26~12/28	3				
東海	静岡・愛知・三重・岐阜	1/18~1/19	2	静岡	エコパスタジアム	160	40
近畿	滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山	1/4~1/6	3	京都	西京極陸上競技場	260	40
中国	鳥取・島根・岡山・広島・山口	12/26~12/28	3	広島	広島県総合グランド	104	21
四国	香川・徳島・愛媛・高知	12/26~12/27	2	香川	丸亀競技場	117	40
九州	福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島・沖縄	12/21~12/23	3	熊本	うまかなよかなスタジアム	171	26
						1,595	360

各ブロックの報告

(北海道)

北海道ブロックジュニア研修合宿は、2014年1月5~7日にきたえーる、セキスイハイムアイスアリーナ、ホテルハシモトを使用して開催した。参加者は選手44名、指導者26名であった。

室内で狭いスペースではあったが、基本的な動き作りを中心とした内容をしっかりと行うことができた。指導者も選手一人一人の動きを

チェックし、各学校に戻ってからの練習内容などアドバイスが十分できていた。

(担当 山岸正直)



(東北)

東北ブロックジュニア研修合宿は、2013年12月21~22日に宮城スタジアム、アークホテル仙台、アパヴィラホテル、ユニゾイン仙台、ホテルパールシティ仙台、ホテルルートイン多賀城、ルートイン仙台泉を使用して開催した。参加者は選手207名、指導者46名であった。第1回目ということで、他県の委員長の負担をできるだけ軽減するために、旅行者を本県山形担当とし、一括して宿泊場所を斡旋した。

予算の関係上、各県とも選手・指導者含め40名以内に限定した。例年3月に東北6県合同合宿を実施しており、会場確保や練習運営面については、それを

参考に実施できたので大きな問題はなかった。会場県の宮城県スタッフを中心に、各県指



導者も協力しながら、「東北は一枚岩」を合言葉とし、震災で更に強まった6県の絆を高める、良い機会となった。

(担当 本間 拓)

(関東・北信越)

関東・北信越ブロックジュニア研修合宿は、2013年12月26~28日に正田醤油スタジアム群馬馬4ヶ所、伊香保温泉 森秋旅館他3ヶ所を使用して開催した。参加者は選手532名、指導者121名であった。

26日正午には全13都県の選手・指導者ともに集合し、午後1時から開講式。午後1時30分から各ブロックごとに種目別練習を行った。翌27日は、天候にも恵まれ比較的暖かな中、前日同様ブロックごとに種目別練習を行った。また、夜は都県別ミーティングにおいて栄養学の講義を資料をもとに実施した。最終日は午前中のみブロックごとに種目別練習の仕上げを行った。正午から閉講式を行い、2泊3日の合宿を無事終えることとなった。

関東8都県では過去20回の合宿を実施してきたが、北信越5県をいれて13都県での合宿は規模も膨らんだが、指導者も選手も新たな刺激をいろいろな場面で感じていた。天候に恵まれたため、予定した練習を各ブロックすべてこなすことができた。

(関東担当 桑原 恵二)



北信越では、冬期降雪があり思い切った屋外での練習が難しい。今回関東ブロックと合同で開催できたことは、競技者にとってより高い競技レベルの中で、天候を気にせず研修をする

ことができた。また多くの選手と共にトレーニングが行えたことで、選手・指導者一人ひとりのモチベーション・競争心もあがり、非常に刺激になった。



(北信越担当 宮崎達也)

〈東海〉

東海ブロックジュニア研修合宿は、2014年1月18～19日にエコパ、ヤマハリゾートつま恋を使用して開催した。参加者は選手160名、指導者40名であった。

初めての開催ということで、各県バス1台で移動できる人数、一泊とし、冬季でも比較的天候の穏やかな静岡県で行うことにした。

指導は各県から実績の豊富な先生方をお願いし、また、選手も東海地区を代表するにふさわしい高いモチベーションで、元気よく練習に取り組んだ。

(担当 鳥居俊秀)



〈近畿〉

近畿ブロックジュニア研修合宿は、2014年1月4～6日に西京極陸上競技場、ホテル本能寺を使用して開催した。参加者は選手260名、指導者40名であった。練習形態は短距離・長距離・跳躍(走幅跳・三段跳/走高跳/棒高跳)・投擲に分かれ練習を進めた。3日間を通して効率良く練習を行う事ができた。

京都が主体となり運営、指導全般を行った。1年前から準備を進め、京都では若手中心に研修に努め、大変良い研修の機会になった。また、他府県の指導者から多方面で意見も頂き、指導法についての良い交流機会にもなったと感じている。

選手達も各府県との交流の深まりや意識の向上が生まれてき、最終日には各パート練習の雰囲気が高まってきて良い状態で行う事ができた。

(担当 片岡真澄)



〈中国〉

中国ブロックジュニア研修合宿は、2013年12月26～28日に広島県総合グランド、ダイヤモンドホテルを使用して開催した。参加者は選手104名、指導者21名であった。今回は第1回目ということもあり、運営面を考慮して、短距離とハードルの2種目にしぼり実施した。まず、初日の午後には走の基本を



テーマに全体練習を行い、2日目からはそれぞれの種目に分かれて基本練習を中心に取り組んだ。3日間とも、山陽側にしては珍しく、寒さの厳しい中での練習となったが、選手たちはお互いにライバル意識を持ちながら、積極的に練習に取り組んでいた。“声の出る勢いのある中国ブロック選手団”として、来シーズン、勝負に挑む!

生徒にとって、とても良い刺激になり、それぞれが来シーズンに向けて意欲を高めることができた。

指導者同士も、これまで顔を会わすことがあっても、じっくり話ができる機会がなかったので、お互いの交流を深めるとも良い機会となった。若手指導者にとっては、貴重な勉強の場となった。練習のみならず、栄養指導や合同でのミーティングも生徒にとって、有意義な勉強の場となった。(担当 坂口英樹)

〈四国〉

四国ブロックジュニア研修合宿は、2013年12月26～27日に香川県立丸亀競技場、オークラホテル丸亀を使用して開催した。参加者は選手117名、指導者40名であった。

四国4県から「四国はひとつ」を合い言葉に、2014年度全国中学校陸上競技選手権大会開催会場に各県の選抜選手と指導者が集結した。全国大会開催会場での練習は、選手や指導者にとって、たいへん有意義な研修合宿となった。全中大会参加に向けての実践的な練習だけでなく、大会当日を想定したシミュレーションなどは、全国大会出場に向けて士気の高揚にもつながった。

良かった点として下記の意見が挙げられた。選手や指導者の交流や親睦が図れた。全国大会参加に向けて士気が高まった。冬期練習に向けての刺激となった。夕食後の栄養指導が、選手や指導者にとって有効であった。全国大会開催会場で、練習ができて良かった。

(担当 高橋利彰)



〈九州〉

九州ブロックジュニア研修合宿は、2013年12月21～23日に熊本・うまかなよかなスタジアム、ホテルアネッサツツヤ、熊本グランドホテル佳松園を使用して開催した。参加者は選手171名、指導者26名であった。

これまで南九州地区では合同合宿を行ったことがあったが、九州全体として実施するのは初めてのことであった。指導者も今までは個人的に他県の指導者と情報をやりとりするという形であったが、今回は全体として意見交換をすることができ非常に良かった。選手同士も交流を図ることができ、今までは“ライバル”という形で見ていた他県の選手が、“九州から一人でも多く全日中で入賞を!”という一つの目標に向かって行くことができるようになった。

(担当 沢田 修)



アジア陸上競技連盟(AAA)カウンシル会議報告

国際委員長 田中 克之 (AAA 副会長)

アジア陸上競技連盟 (AAA) の第78回カウンシル会議が2014年3月2日 (日)、カタールのドーハで開催されたところ、その概要は下記の通りである。

なお、今回のカウンシル会議についての大雑把な印象を述べれば次の通りである。

(1) AAAのダラン会長が、地元であるドーハ (カタール) で開催した初めてのカウンシル会議であったこともあり、開催前からダラン会長自らが指揮を執りアジア各国の陸連の実情や問題点などをアンケート調査するなど同会長の意気込みが伝わってきた会議であった。これまでアジアでは開催されてこなかった「アジアユース選手権」の開催に強い意欲を示したのもその表れであろうと思われる。

(2) 今回会議のポイントは前回のカウンシル会議で設置された4つのコミッション会議をカウンシル会議の前日に開催し、各コミッションの報告・提案を受けてその是非をカウンシルが議論する形式を取った点にある。これはIAAFの形式を踏襲したものであるが、カウンシルはコミッションからの提案に対して右か左か決定を迫られるので、前AAA体制時と較べると、緊張感のある会議になった。

(3) IAAFで電通が行っているような役割を果たそうとする企業がこれまでAAAには現れなかったが、マーケティングコミッション委員長に就任した中国の第一副会長がシンガポールに拠点をもち広告会社を探し出した。他にこのような企業が現れなければ更に条件交渉をし、2ヶ月ほどで契約調印まで持っていきたいと提案しカウンシルは一応これを認めた形になった。

(4) 競技・コミッション関係では「アジア選手権の開催年」を巡りカウンシル会議でも議論がなされた。種々の理由から奇数年 (世界選手権開催年) ではなく偶数年にする意見の方が多かったが、未だ決定されたわけではない。

1. 出席者

◆ AAA: カウンシル・メンバーはイランの副会長とチャイニーズ台北の理事を除く全メンバーが出席。加えて、AAA法律顧問のロー・リン・コック氏

◆ カタール: スポーツ担当大臣

◆ IAAF: プブカ副会長、マレク開発・加盟団体担当部長

2. 会長挨拶

ダラン会長より要旨次の通りの挨拶がなされた。

◆ 自分が会長になって初めてのドーハにおけるカウンシル会議が開催できて喜ばしい。

◆ 現在、アジアは世界でも最も経済発展が著しく、世界経済の将来はアジアに係っているとと言われるが、陸上競技も同様だ。しかし我々アジアの陸上関係者はこの期待に応えられるような努力をして来たかと問われると、「そうだ」とは言えない。このため、自分は前回のカウンシル会議で4つのコミッションを立ち上げ、多くのカウンシル・メンバーにその委員になってもらったが、その最初の会議が前日に1日かけて行われた。今日はその検討結果が報告されることになっているが、自分はどういう報告が行われるか楽しみにしている。

◆ 議論することも大切だが、いつまでも議論していても意味がない。我々は物事を決めることが仕事であることを忘れてはならない。

◆ 2月にアジアクロスカントリー選手権のため、日本の福岡に行ったが、いわゆるアジアのエリート・ランナーだけではなく非常に多くの地元選手も参加し本当に良い雰囲気の中であった。また、今までやっていなかった優勝選手の国の国旗を掲げ国歌吹奏を行ったが、これは地元からの参加者にも「国際大会に参加しているのだ」という誇らしく思う感情を持たせたのではないと思う。大会運営もきちんとしており、自分は大きな感銘を受けた。

3. 事務総長報告

ニコラス事務総長兼名誉会計から、前回のカウンシル会議 (2013年9月21日: 中国・武漢) 以降に行われたAAA主催大会、今後行われるAAA主催大会、アジア大会などについての報告に加え、「IAAFは昨年10月に国際審判員 (ITO) パネルに登録されるためのセミナー及び試験を行ったが、アジアからこれまでで最高人数である5名が合格し同パネルに登録されることになったことは大変喜ばしい」と報告があった。

4. コミッション報告

新設された4コミッションからの報告と提案は次の通り。

【普及】

このコミッション委員長であるダラン会長から、次のような報告と提案がなされカウンシルはこれを承認した。

①報告

◆ ダラン会長のイニシアチブで各国陸連に行った調査によれば、アジア各陸連で一番大きな問題として認識されているのは「(競技者能力の) 開発」と「指導、教育」であることが判明。

◆ 各国陸連はRDC (Regional Development Centre) がどのように運営されているかよく分かっておらず、その結果RDCを十分活用しているとは言えない。

◆ IAAFのマレク部長からはRDCのほか、トレーニング施設であるHPCT (High Performance Training Centres) やATC (Accredited Training Centres) の目的、どのように活用すべきかについての説明が行われた。プブカ副会長からは世界選手権の標準記録突破を達成させるためには一流コーチを最大限活用することが大切であるが、そのためには各国陸連は何を成すべきか (例えばオリンピック・ソリダリテイ (奨学金制度) をどのように利用するかなど)、ならびにキッズ・アスレチックプログラムをどのように取り込むかが重要であるとの説明がなされた。

◆ ダラン会長としては2人のカウンシル・メンバーに各国陸連を訪問してもらい、普及問題にどのように取り込んでいるのかを調査してもらいたいと考えている。

②提案

◆ オリンピック・ソリダリテイプログラムを有効に活用する。

◆ 途上国の選手をトレーニングするため、2015年のアジア選手権に向けて集中トレーニング・キャンプを作り上げる。

◆ 各国陸連はIAAFのキッズ・アスレチックの活用を考えるべきである。

◆ 2015年のアジア選手権や総会の際にいかにして陸上競技を発展させるかについて各国陸連会長、専務理事に出席してもらい意見交換の場を作る。

◆ 2人の専門家を各国陸連に派遣し、開発問題にどのように取り組んでいるか見てもらう。

【競技】

委員長から次の議論があったことの報告があった。

◆ アジアの大会カレンダーをどのように設定するか。

◆ アジア選手権は奇数年に行われているが、カレンダー作りを容易にするという観点から、他の地域と同様に、偶数年に (世界選手権が開催されない年) 開催した方が良いのではないかと。さらにOCA (アジアオリンピック評議会) はアジア大会を2018年から2019年に移した。この結果今のままでいけば2019年にはアジア大会とアジア選手権が同年開催になるということもある。

◆ アジア記録を認定する手続きが曖昧であるので、申請書類をはじめ、きちんとした手続きを定めるべきではないか。

◆ アジア陸連はパーミットを出すことが認められている大会についてはもっと有効にパーミット制度を運用すべきではないか。

同報告を受けてカウンシルでは主として「アジア選手権の開催年

は奇数年が良いか偶数年が良いか」について議論が展開された。各国選手権、アジア選手権、世界選手権という具合にやるのが望ましい姿だ（従って今まで通り奇数年に行く）という意見や、IAAFは数年前に「地域選手権優勝者には参加標準記録に達していなくともその後にかかれる世界選手権の参加権を与える」というルール変更を行ったが、偶数年開催にすれば、この利点を失わせることになるのではないかという話もあった。しかし多くのカウンシル・メンバーは偶数年開催に賛成との意見であった。はっきりとした決はとられなかったが、このままでいけば偶数年開催ということになるものと思われる。この場合、明年の武漢（中国）でのアジア選手権後は2016年にその次の大会開催と勝るのか、2017年にするのかが問題になるが、この点についての議論は行われなかった。

【マーケティング】

①報告

委員長から次のような報告が行われた。

- ◆ アジアでは、スター選手の不在、記録の低調さ、TV放送が国際的に行われないことなどからスポンサーになる企業がなく、AAAは主としてAAA会長の寄付金あるいはIAAFの補助金に依存してきた。
- ◆ これまでIAAFに対して電通が果たしている役割を果たせる企業があるか否か主要広告会社に打診してきたが、良い返事はもらえなかった。唯一可能性ありということで現れたのがTSA (The Sporting Age) という企業である。この企業はシンガポールを拠点にしたスポーツ分野のマーケティングを専門にする企業だが、陸上競技には精通しており、アジアやアフリカでのマーケティングに強い。
- ◆ 他に手を挙げる広告会社があれば知らせて欲しいが、現れない場合には2ヶ月程の間にTSAとの交渉を纏めたいと考えている。

②提案

以上を説明した上で、委員長は、コミッションの考えとして次の提案を行った。

- ◆ マーケティング活動を容易にするため、AAAの憲章やルールを精査し必要があればこれを改正し、マーケティングに関わる規則を作成する。
- ◆ AAAのイベントを製品と考へ、この価値をどのように高めるか検討する。
- ◆ 専門的知識のある機関の力を借りて交渉を行い、2ヶ月程で署名に至る。

③以上の説明、提案に対し田中からいくつかのコメントをしたが、その他の発言はなく、カウンシルはコミッション報告及び提言を承認した。

【スクール&ユース】

委員長である私より次のような報告と提言を行い、特別な議論もなくカウンシルはこれを承認した。なお、ダラン会長は「アジアユース選手権」の新設は自分の考えとも合致するとして積極的賛意を示した。

①報告

- ◆ スクール&ユース分野では当面我々が行うべきなのは、IAAFのスキームが各国陸連により十分活用されているか否かを調べ、より活用するためにはどうすれば良いのかということを考えることだ。AAA独自で何かを行う必要性があるか否かはその後で考えれば良い。
- ◆ IAAFのスキームで最も代表的で成功しているプログラムはキッズ・プログラムだが、これについてはアジア地域の各国陸連はRDCのこれに関するコースや各国が開催するセミナーなどに人員を派遣するなどそれなりに活用している。ただ問題はRDCの研修コースや他国主催のセミナーに派遣され「キッズ・アスレチックス講師」の肩書きを得た人員が、帰国後どのような形、頻度でキッズ・プログラムの普及に努めているのか良く把握されていない点にある。
- ◆ キッズ・アスレチックスは12歳児までを対象とするものだが、それ以上の年齢のもの（ユース）を対象としたプログラムについてはIAAFも苦慮しているのが実情である。一番問題な

のはこの年齢層を対象とした大会が不足していること、又大会が開かれたとしてもやり投や、ハンマー投、棒高跳など一部種目が含まれていない大会になっていることである。

- ◆ 以上のことを考えると、IAAFの児童・ユース年齢層対象プログラムに対するステークホルダーの関心をどうやって高めるか、キッズ・アスレチックス講師の肩書きを持った人達の積極的活動を確保し又その具体的活動を地域陸連としてどうやって把握するか、ユース年齢層対象の陸上競技大会をどうやって増やすかを考えることが必要になる。

②提言

- ◆ 次年度から各国陸連のIAAFへの年次報告は先ず地域陸連に提出され、しかる後にIAAFに提出されることになる。（各陸連のキッズ&ユース活動をよりキチンと把握し対策を検討するため）AAAはその際メンバー陸連に対しスクール&ユース活動欄を新たに設けキッズ・アスレチックスの講師やコーチ資格を得た人達の自国での活動を含め各国陸連のキッズ&ユースに関する活動を報告させるようにする。
- ◆ AAAの主催大会として明年度から「アジアユース選手権」を設ける。
- ◆ スクール&ユース活動が重要であることの認識を高めるため、各国陸連でスクール&ユース委員会あるいはこれに相当する委員会を設けていない陸連においてはスクール&ユース委員会を設置する。
- ◆ スクール&ユース活動への関心を高め、同活動がより一層活発化するよう児童や若手アスリート、講師及びコーチへのインセンティブとしてTシャツ、ピン、リスト・バンド、表彰状などを付与する。
- ◆ 各国陸連はRDCのコースに出席したり他国でのセミナーでキッズ・アスレチックスの講師やコーチとして認証された者が帰国後積極的にキッズ・アスレチックスの普及活動を行うよう措置する。

5. AAA戦略プラン

(1) 昨年のモスクワIAAF総会の際にIAAF戦略プランが承認されたが、その際に各地域陸連もIAAFの戦略プランに沿った形で地域の戦略プラン（CASP）を作ることが求められた。その後、AAAも専門家の助力を得てCASP案を作成し、本年2月モナコでIAAF側に説明を行いIAAFの了承を得た。

(2) ダラン会長よりこれまでの経緯の説明に加え、CASPでは「AAAのゴールを次の4点に絞り、2017年までにこれを達成する」ことになっている旨述べカウンシルの承認を得た。

- ① 強いインパクトを与えられる少数の魅力的で価値の高いイベントを開催すること
- ② これまではAAAの資金源はIAAFであったが、半分以上の資金はIAAF以外から調達すること
- ③ 各国陸連はこれまでAAAよりもIAAFを頼りにし、直接IAAFとコンタクトする傾向があったが、AAAは彼等にとり頼りがいのあるパートナーであることを実証すること
- ④ 国際的に競争力のある選手を生み出すようAAAとしての「選手強化策」(Development Program)を持つこと

6. AAA主催大会についての報告

中国の杭州で開催された「アジア室内選手権」と福岡で開催された「アジアクロスカントリー選手権」について報告がなされ、ここでもダラン会長より「福岡のクロスカントリーに感銘を受けた」との発言があった。

7. 今後開催予定のAAA大会についての報告

- ◆ ①アジア競歩選手権（3月、日本・能美） ②ユースオリンピック・アジア地域予選（5月、タイ・バンコク） ③アジアジュニア選手権（6月、台北） ④アジア選手権（2015年6月、中国・武漢）についての簡単な報告が行われた。なお、④については開催期日を2015年6月3～7日としたい旨の発言がありカウンシルはこれを承認した。
- ◆ 2014年度のアジアグランプリについて、ニコラス事務総長から「今年は都合がつかなくなったため開催を取りやめたい」との発言がありカウンシルはこれを承認した。

国際陸上競技連盟 (IAAF) 技術委員会報告

事務局事業部専任課長 関 幸生 (IAAF 技術委員会委員)

2014年2月8日(土)～9日(日)、イタリア北西部の都市アルバでIAAF技術委員会会議が開催された。またそれに先立って、2月7日(金)には、モナコのIAAF本部で、来年北京で開催される世界陸上のタイムテーブル調整会議がおこなわれ、競技運営の責任者である技術代表3人のひとりにIAAFから指名を受けている私も参加した。

IAAF技術委員会委員に就任して2期目、1期とあわせて7回目の委員会会議出席となるが、2008年に世界室内選手権にあわせスペインのバレンシアでおこなわれた以外は、モナコにあるIAAF本部でおこなわれてきた会議だったが、今年は、IAAFの施設用器具提供スポンサー企業の工場見学などを兼ねて同社の本拠地が会場となった。

技術委員会は、「競技規則に関するすべての問題を取り扱う」とされ、委員長と16人の委員をもって構成されている。昨年、スウェーデンの委員が急逝。さらに5名の出席がかなわず、委員長あわせて11名の参加という寂しい会議となった。

【IAAF技術委員会と規則の修改正】

IAAF憲章では、選挙が主目的の総会と規則修改正が主目的の総会を2年ごとに交互に実施することになっている。規則修改正が主要議題であった昨年のモスクワ総会前の技術委員会では、各国から提案されていた修改正提案内容の検討に多くの時間を費やした。技術委員会の賛同を得ることができない提案は、規則として採用されることはないの、委員会メンバーの責任は重大である。

今年は、IAAF総会がなく、規則の修改正も基本的には行わないものの、この1年を振り返り、世界で開催されたIAAF主催はじめ様々な競技会で発生した規則を巡る事象の検証、現行規則の表現が適切かの評価、そして規則の運用方法についての検討がなされ、議題にあがった検討案件は90項目にもなった。私も、本連盟の競技運営委員会と施設用器具委員会が話題になったことや、自身が国内外で遭遇したり、相談を受けた20弱の案件について委員会に提起した。

規則に関するといってもその内容は多岐に及ぶため、4つの分科会を設け、事前検討した結果を全体会議で審議するという会議の進め方をとっている。全体会議で委員の賛成を得た案件については、4月に開催されるカウンシル会議(理事会)に報告提案され、緊急を要する案件として認識されれば、本年11月に規則修正がなされ、緊急ではないが修正が必要な案件は来年8月のIAAF北京総会で承認を求められることになる。委員会内の4つの分科会は、「競技規則」、「競技場」、「テクノロジー」、「用器具」であり、私は用器具分科会長に指名されている。

【主要検討内容】

委員会で検討されたなかで、特記すべき内容はつぎの通りである。

◆投てき競技実施可能な人工芝

投てき実施可能な人工芝は、日本の製造会社が初めて開発し、ここ数年、技術委員会の席上で紹介し続けてきた。国際サッカー連盟がピッチへの人工芝導入に積極的なことから、IAAFとしても投てき競技も実施可能な人工芝の開発と普及が急務になっており、また各国からの問い合わせも多い案件である。IAAFは、イギリスにある検査機関と協力し、IAAF公認制度を確立するための検証作業を続けてきた。2年前にはIAAFからの要請により、開発各社は、サンプルを検査機関に提出した。このサンプルをもとに、IAAFは認証を進めるとの説明だったが、日本の製品の質は極めて高く、サッカーとの共存も可能であるとの報告がIAAFに提出されたものの以後、予算の問題も

あり認証作業が宙ぶらりんの状態になっていた。しかし、今回の会議で、実際に投てき競技が実施されている神奈川県内の大学施設で、本連盟施設用器具委員会が実地調査したビデオを私が持参し、委員会メンバーに具体的に説明したところ、委員会として、投てき競技実施可能な人工芝の使用を積極的に進めるよう、IAAFカウンシル会議に提言することが決定した。大きな進展である。

◆リレーバトンにレーン番号

昨年のモスクワ世界選手権のリレーで、2選手が接触し、両者がバトンを落とすという事象が発生した。その際、2人ともバトンを拾ってフィニッシュしたのだが、ここで議論となったのは、相手のバトンを拾ってフィニッシュした競技者のチームは失格となるのか、という点であった。規則には、「バトン」を持ってフィニッシュしなければならないことは、明記されているが、今回のケースは想定外であった。

技術委員会では、「スタート時に持っていたバトンをフィニッシュまで保持すること」と規則に加えることに合意し、修正前ではあるが、直後に開催された世界室内選手権では、大きくレーン番号を記したバトンが使用された。

また4×800mリレーや4×1500mリレーも種目に含まれる、今年初めてバハマで開催される世界リレーでは、初の試みとしてバトンの中にトランスポンダーを装着し、ラップや途中計時の助けとすることになった。

◆投てき器具のチェック

IAAFは世界記録承認に関わる規則260条のなかで、投てき種目の記録達成時には、投てき用具の検査を義務付けているが、今回修正され26項(d)に記載された内容では、競技中と競技後に2度検査するというようになっており、本連盟の競技運営委員会や施設用器具委員会から詳細の確認が要請されていた。技術委員会が英語表現の不十分を提示したところ、より適当な表現に改めることになり、競技中は、競技者を待たせることのないよう、番号を振るなどして記録を出した用具の特定に留め、検査は終了直後の実施がよいことが確認された。

◆IAAF認証制度

毎年、時報で報告しているが、IAAFは、競技場及び用器具の承認システム推進を積極的に進めている。競技場認証は、クラス1と2という2つの種別に分かれているが、この制度を担当するのも技術委員会である。3月1日現在、世界にクラス1は104か所(1年前は91か所)、クラス2は489か所(同416か所)と年々増加している。近年、国内でもこの認証システムの理解が進んできているように感じる。IAAFやアジア陸連の大会を開催するには承認は必須であり、世界記録及びアジア記録は、これらの競技場で達成されるか、その後、同じ基準に沿って計測されなければ認められないことも理由であろう。また2015年の北京世界選手権や2020年の東京オリンピック・パラリンピックの事前合宿誘致を目指す自治体にとっては、世界基準のスタジアムは有効なPR材料になりそうである。

IAAFは、世界のどこにいても、すべての選手が同じ条件下で競技し記録が残せることを目的として、承認競技場の世界的普及を推し進めている。そのため途上国でも競技場承認が可能となるよう最低限守るべき基準を設定している。他方、日本には歴史ある競技場の公認制度が存在するが、スタンドの客席数や用器具の必要量の常備などIAAFより基準が厳しいほか、公認期間とその更新も厳格に定めているなど、世界に誇るべきものであることは知っておきたい。

◆女性単独レースの定義

IAAFは規則を修改正し、本年から競歩を除く女性のロードレース

の世界記録は、女性単独レースと男女混合レースとで、別々に認定することとなった。ところが、規則には、「女性単独」の定義が明記されておらず、完全に別レースでなくてはならないのか、時差スタートでもよいのか、時差でよい場合、何分空ければよいのか、様々な疑問が、本連盟競技運営委員会内で提示されていた。そのため私から、この問題を提起したところ、委員会としても、定義を明確にする必要に同意するとともに、3月に開催される世界ハーフマラソンでも実践されているように、相応な時差があれば、「女性単独」として認めることが確認された。具体的な時差については、今後、IAAF内の関係委員会で検討が進められる。

◆投てき種目セクター角度変更後の世界記録

IAAF選手コミッション委員でもある室伏広治選手からの提案が、技術委員会でも検討された。投てき種目の落下点の角度（セクター角度）は、規則改定により狭くなっている。角度が狭い現在、競技者は物理的だけでなく、精神的にも不利な状況にあり、世界記録を別に設定すべきであるという提案であった。IAAFは過去、やりの重心を前に移動させたときに、世界記録を新たに設定したことがある。しかしながら、今回の提案は、用具に直接かかわる変更ではないことから、世界記録を別に設定することは適当でないという結論に達した。

◆技術代表パネル

IAAFは、IAAF主催競技会の競技責任者である技術代表のレベルを一定にするため、昨年秋のIAAF国際審判員セミナーの際に、技術代表セミナーを実施し、その参加メンバーを、パネル（リスト）に記載した。今後、IAAF主催競技会の技術代表は、このパネルから選ばれるが、配布されたリストには、アジアではUAE、インド、中国、香港、日本の5名の名前があった。私もその1人に加えられた。

◆国際スターター

IAAFが、3月の世界室内選手権の際に、国際スターターセミナーを開催することを予定していることが報告された。4年前に5か国5名が、初めてのセミナーに合格し国際スターターに任命されたが、今回は、同じメンバーが対象であるという。前回、アジアは招待されず、国際経験のなさを指摘されていたが、今回はアジアは対象外であったことから、私は、北京オリンピックで主任をつとめたスターターは、中国外でもピストルを撃っているし、アジア内でIAAFスターターセミナーの講師をつとめるなど、経験は十分であるし、よって国際スターターは最低でも各大陸に1名任命すべきであると強く主張し、中国の委員からも支持する意見があった。IAAFとして前向きに考慮するとこの回答があった。

2020年を控え、ぜひ日本からも国際スターターを推薦できるよう、言葉の問題に加え、世界基準を意識できればと思う。

◆出版物の改定

毎年、時報で紹介しているが、技術委員会は競技に関する各種の出版物を編集しており、IAAFサイトからダウンロードも可能である。<http://www.iaaf.org/about-iaaf/documents/technical#manuals-guidelines>

前回会議の報告では、ルールの解釈が網羅された「レフェリーブック」と、施設の施行についての詳細を記載した「施設マニュアル」が昨年発行されるとお伝えしたが、編集作業がずれ込み本年の刊行となった。

技術委員会は、ルールブックを簡潔にし、「適正な」ページ数にしようとしている。その手段が、ルールブックを補足する「レフェリーブック」と「施設マニュアル」の発行であり、ルールブックの記載内容をこれら2冊に移す動きがあることを理解しておく必要がある。つまりルールブックに記載がなくとも、これら2冊に記載があれば、ルールと同じ扱いがされるということである。日本の「陸上競技ルールブック」の大半は、IAAF規則の邦訳であるが、その11ページ（2014年版）

には、「レフェリーは、競技会規則の解釈及び解釈のための実践的ガイダンスが提示されている」と記載されている。

このほか、「競歩審判法」、「スターターガイドライン」、「国際写真判定義員ガイドライン」「技術代表ガイドライン」といった解説書も発行されており、国際的に推奨される基準が網羅されている。日本で推奨されているのとは異なる内容もあり、2020年に向けて、世界の基準を認識することも必要であると感じる。

【IAAF用器具提供スポンサーと強制力】

今回の会議は、IAAFのスポンサー企業の本社所在地で開催されたと言頭で述べた。

IAAFは、イタリアに本拠があるこの施設用器具製造会社とサプライヤー契約を結んでいる。同社は、元々は、風船などのゴム製品製造を得意としておりサッカーボールも製造している。トラック舗装材の開発製造のほか、各種陸上競技用器具も扱っている。トラック舗装材の工場はイタリアのアルバにあり、用器具の工場はスペインにある。今回のアルバ滞在中は、トラック舗装材の製造工程をつぶさに見学することができたが、写真撮影は、企業秘密で厳禁であると釘を刺された。工場内では、耐圧、耐久検査等の様子も披露されたが、品質の確かさをアピールしなかったのかもしれない。

IAAFは、長年、同社とスポンサー契約を結んでおり、IAAF主催競技会が実施されるスタジアムのトラックに同社の舗装材を使用して欲しいとホスト国に要請はしているが、強制ではない。過去、世界選手権やオリンピックの大部分でこの製品が使用されているが、91年東京、07年大阪、09年ベルリンでは、別会社の舗装材が使われている。

IAAFは同社以外にも、世界22カ国70社の144製品をIAAF承認品として認定している。IAAF規則では、世界記録やアジアなどの地域記録が承認されるためには、スタジアムは、トラックにはIAAFが承認した舗装材が使われ、かつスタジアム自体もIAAF認証を得る必要がある。さらに世界陸上やオリンピックでは、スタジアム認証は最高レベルのクラス1が必要である。別の言い方をすれば、IAAFスポンサー業者以外の舗装材であっても、IAAFの認証がある144製品のどれを使っても記録の認定や大会を開催することは問題ないのである。

器具に関しては、2011年のテグ以降、IAAFが主催する世界選手権では、メインスタジアムでは、同社の製品を使用することが同社との契約条件に加わり、義務付けられている。スペインの工場からの運送費と返送費、期間中のメンテナンス要員の人件費は同社持ちだが、宿泊費用はホスト国持ちとなる。

テグの世界選手権では、新ルール対応への開発が間に合わなかったハンマー投の囲いを除いた器具のすべて、モスクワでは囲いも含めたすべてが提供された。モスクワのハンマー投用の囲いに関しては、出場した室伏広治選手からネットの設置仕様についてクレームが寄せられ、現地で私も含めたIAAF関係者と同社技術者が立ち会い、調整をしたという裏話もあった。

同社による器具提供は、搬送費用の問題と、テレビ放映を意識してか、メインスタジアム限定であるため、サブトラックでは別会社の器具が用意される可能性があり、競技者にとっては、必ずしもよい条件ではないのかもしれない。

ちなみに、スターティングブロックは、不正スタート発見装置とリンクしているため、記録計測スポンサーの提供、投てき用具は、過去の主要競技会で使用頻度が高かった複数社の製品が提供されている。余談だが、IAAF主催競技会の投てき種目では、この目的から、どの競技者がどの投てき器具を使ったかすべてリストに残すことが、大会運営に義務付けられており、チェック作業を容易にするためすべての投てき器具には通し番号が記されている。

大会観戦ガイド

IAAFワールドチャレンジミーティングス第3戦 セイコーゴールデングランプリ陸上2014東京 兼 第17回アジア競技大会(2014/仁川)代表選手選考競技会

▼日時：2014年5月11日(日) 競技開始時間 12:15予定
(オープニングセレモニー 11:45開始予定)

▼会場：国立競技場 (TEL: 03-3403-1151)
東京都新宿区霞ヶ丘町10番2号

▼種目：

【ワールド・チャレンジ・ミーティングス】

〈男子10種目〉100m、200m、800m、400m、3000mSC、走
高跳、棒高跳、三段跳、砲丸投、やり投

〈女子7種目〉100m、200m、1500m、100mH、走幅跳、
ハンマー投、やり投

【オープン種目】

〈男子・女子〉4×100mリレー、4×400mリレー

※上記種目は予告なく変更になる場合があります。

▼テレビ放映予定：TBS系列で放送 15:00～16:54

▼公式HP：<http://goldengrandprix-japan.com/>
選手情報等、大会最新情報はこちらから。

▼チケット：好評発売中

〈豪華10大特典+1「ラン&ウォーク参加権」のついたゴ
ールデンシート販売情報〉

【席数】 先着200席限定

【チケット料金】 お1人様 10,000円

〈メモリアルRUN付きシート/S・A・B席(エリア内自
由席)販売情報〉

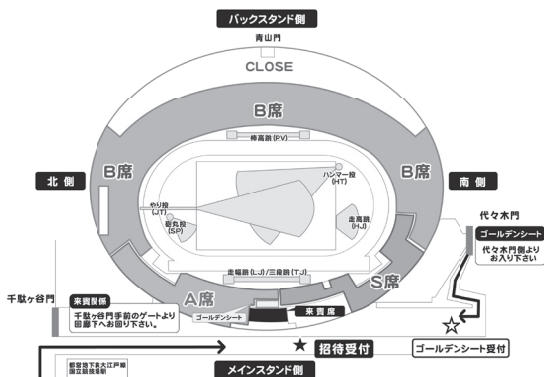
【席数】 先着800席限定

【チケット料金】 お1人様 3,500円

【特別企画】SAYONARA国立競技場 メモリアルRUN「ラン&ウォーク参加権」
2020東京オリンピック・パラリンピックの主会場として生まれ変わる
国立競技場。解体前の国立競技場のトラック(芝生エリアは立入禁止)
を走れる特別企画です。選手だった方も観客として感動した方も最後
の国立競技場を皆様の思い出としてお楽しみください。

【申込み方法】 大会公式ホームページよりお申込み
ください。

ホームページURL：<http://goldengrandprix-japan.com>
ゴールデンシート・メモリアルRUNシートの問い合わせ
先：(株)アポルテ内03-6277-5310 (平日10:00～18:00)



〈一般入場券販売情報〉

座席カテゴリー	前売り	当日
S席/一般(エリア内自由席)	3,000円	3,000円
S席/小学・中学・高校生(エリア内自由席)	2,000円	2,000円
A席/一般(エリア内自由席)	2,500円	2,500円
A席/小学・中学・高校生(エリア内自由席)	1,500円	1,500円
B席/一般(エリア内自由席)	—	1,000円
B席/小学・中学・高校生(エリア内自由席)	—	500円

※小学生未満無料。 ※S席はA・B席へ移動可能。 ※団体割引は、10
枚単位で販売(大会問い合わせ窓口にて前売券のみ対応。プログラムは付
きません。) ※シルバー割引(当日券のみ)は、60歳以上の証明書提示に
て一般料金より50%割引(S・A・B席対象)。 ※障害者割引(当日券のみ)
は、証明書提示にて一般料金より50%割引。付添人1名まで同一料金(S・
A・B席対象)。 ※各種割引詳細、車椅子席等のお問合せは大会問い合わ
せ窓口まで。

前売チケット販売概要

■チケットぴあ(Pコード: 826-102)

インターネット購入：<http://t.pia.jp/t/> (24時間購入可能)

電話予約：0570-02-9999 (Pコード予約)

※チケットの購入にあたってはPコードが必要になります。

店頭販売

・全国のぴあ店舗

※営業時間は店舗によって異なる場合がございます。

※所在地・営業時間は<http://t.pia.jp/guide/retail.html> よりご確認ください。

・セブンイレブン (24時間購入可能)

※店頭のマルチコピー機よりお買い求め下さい。

・サークルK・サンクス (7:00～23:00)

※店頭のカルワザステーションよりお買い求め下さい。

■ローソン(Lコード: 33134)

インターネット購入：<http://l-tike.com/> (24時間購入可能)

電話予約：0570-084-003 (24時間受付可能)

※Lコードが必要になります。

店頭販売

・全国のローソン (24時間購入可能)

※店頭のLoppiよりお買い求め下さい。

■e+ (イープラス)

インターネット購入：<http://eplus.jp/> (24時間購入可能)

店頭販売

・全国のファミリーマート (24時間購入可能)

※店頭のファミポートからお買い求め下さい。

■CNプレイガイド

インターネット購入：<http://www.cnplayguide.com>

(6:00～翌1:00)

電話予約：0570-08-9999 (10:00～18:00)

※オペレータ対応

店頭販売

・CNステーション

※営業時間は店舗によって異なる場合がございます。

※所在地・営業時間はhttp://www.cnplayguide.com/info/cn_station.htm よりご連絡下さい。

・セブンイレブン (24時間購入可能)

※店頭マルチコピー機のセブンチケットの項目からお買い求め下さい。

チケットに関するお問い合わせ先

大会問い合わせ窓口(ゴールデンシート、メモリアルRUN付
きシートを除くチケットのお問い合わせ等)

TEL: 03-5974-1192 (土日祝を除く10:00～18:00)

事務局からのお知らせ

◆◆陸上競技ルールブック2014年度版を4月より全国の書店、ネット書店で販売開始しました。◆◆

陸上競技関係者や愛好家のための2014年度版ルールブックの発売を開始しました。

修改正のあった国際及び日本国内陸上競技ルールを反映し、すべてのルールのほか競技場の仕様、全国の公認陸上競技場一覧などを掲載しているルールブック。

お近くの書店にない場合は、電話またはホームページからご購入いただけます。

お電話でのご注文の場合：0120-911-410（ベースボール・マガジン社 受注センター）受付時間（月曜日～金曜日10:00～12:00、13:00～16:00（祝祭日を除く））

ホームページからご注文の場合：ベースボール・マガジン社のホームページへ。<http://bookcart.sportsclick.jp>

競技規則を正しく把握して、審判技術の理解を深め円滑な競技会運営を実行するために審判員必携のハンドブック、審判員のための2013-2014年度版ハンドブックは昨年4月から変わらず発売中です。



◆◆2014年トラック&フィールドシーズンが始まります！◆◆

いよいよ今秋開催の第17回アジア競技大会（2014／仁川）の代表の座をかけた2014年トラック&フィールドシーズンが始まります！

4月からの競技会の情報は、公式ウェブサイト <http://www.jaaf.or.jp/> に掲載しています。

是非、競技場でご声援をお願い致します！

◆◆陸連時報を本連盟公式ホームページで公開しています！◆◆

2013年1月号から陸連時報を本連盟公式ウェブサイトで開催しています。

アドレスは、<http://www.jaaf.or.jp/rikuren/jihou.html> です。



陸連時報編集委員

◇編集委員

横川 浩（陸連会長）
三宅 勝次（陸連副会長）
友永 義治（陸連副会長）
尾縣 貢（陸連専務理事）
原田 康弘（陸連強化委員長）
風間 明（陸連事務局長）
高橋 克実（陸上競技マガジン編集長）

◇時報編集室責任者

森 泰夫
◇時報編集担当
繁田 進
石塚 浩
木越 清信
宮田 宏
本田香代子
森谷 真咲

陸連時報編集室

〒163-0717
東京都新宿区西新宿2-7-1
小田急第一生命ビル17階
公益財団法人日本陸上競技連盟 内
TEL 03-5321-6580
FAX 03-5321-6591
ウェブサイト <http://www.jaaf.or.jp/>
公式動画サイト <http://japanathletics.tv/>